

2018年11月

第9回 留学生レポート

2014年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生

Ph.D. student, Department of Economics, Stanford University

野田 俊也 (Shunya Noda)



ジョブマーケット用に、スーツを着てプロフィール写真を撮影しました。

服装に関して砕けた空気の西海岸では、スーツを着る機会はこれまでに一度もなく、渡米時に持ってきたスーツはまったくサイズが合わなくなっていたので、アメリカでスーツを買い直しました。

サイズに関する表記が色々違ったり、日本では横幅の広い服しか着られない私が、extra slim fit model のシャツがぴったりだったり、かなり勝手が違ってドタバタしました。

2014年秋より、スタンフォード大学の Ph.D.プログラムに留学している野田俊也です。就職活動で多忙な日々を送っています。本格的に精神的の負荷の強い生活を送っていますが、あまり思いつめてもまったく良いことがないのはよくわかっているので、適度にリラックスしつつ、なんとかがんばります。

1. 就職活動

現在、就職活動の真っ最中です。アカデミアを基本として、60 個ほどのポジションへの出願を行いました。これは経済学界のスタンダードとしてはかなり少ないほうで、先輩からは「どんなに少なくても 100 個は出願しろ、200 ぐらい出すのがふつうだ」というアドバイスもいただきました。それに逆らって(?) 60 個程度の出願にとどめたのは、私のような理論経済学分野だと、実証系と比べると求人が少なめなこと、アメリカのジョブマーケットにタイミングを合わせて求人を出す日本の大学が少ないことが主な理由です。

アメリカのジョブマーケットは、かなり提出する書類が画一化されており、いったん書類の準備がすんでいけば、新しく書類作成を行う手間は少ないです。書類は、主に 3 通 (以上) の recommendation letters, cover letter, cv, job market paper, research statement, teaching statement, teaching evaluation の提出を要求されるところが多く、ごく少数の大学からは、「自分が多様性にどう貢献できるか」などの作文を提出させられることもありました。この点は、シラバスの作成や模擬授業の実施を採用段階で行われる日本の求人とは大きく異なるようです。出願するのが楽だという意味ではいいことですが、簡単にたくさん出願できることから、学生 1 人あたりの出願数は増加するため、審査する側は大変だとも思います。

一応、すでに書類提出はだいたい終わりましたので、これからは、順調であれば、大学から連絡をもらい、年明けにアトランタで行われる学会で面接を受け、そこでも首尾よく進めば、各大学からフライアウトに呼ばれるということになります。また、これとは別に、私に興味を持ってくださっている日本の大学もあり、この 11 月はその大学から時期をズラしてフライアウトに呼んでいただくこともできました。

このように、現在は多忙な上、この先どうなるかの見通しがまだ立たないので、簡潔な報告になってしまいましたが、就職活動が一段落したら、あらためて経過をお知らせいたします。

2. Job Market Paper, "Large Matchings in Large Markets with Flexible Supply" 公開

新作論文、"Large Matchings in Large Markets with Flexible Supply"を SSRN に公開しました。今まで書いた論文の中では一番の自信作で、この論文が私の Job Market Paper (就職活動に使用する、博士課程在学中に書いた一番良い論文) になります。論文は、以下の URL からダウンロードできます。

https://papers.ssrn.com/sol3/Papers.cfm?abstract_id=3215670

この論文は、one-sided matching problem と呼ばれる、メカニズムの参加者 (agent) の集合に、何らかのモノ (object) を、金銭の移転などを介さずに割り当てる問題を考察しています。政策の目的は大きなサイズを達成する (= なんらかの object を獲得した agent の数をなるべく大きくする) ことです。

サイズは、例えば国連などが実施している、亡命中の難民の第三国への居住権の再割当ての問題 (refugee resettlement problem) における再割当ての総数や、近年、日本で深刻化している保育園の利用調整問題 (daycare assignment problem) における待機児童の少なさに相当する、非常に重要な政策目標です。その重要さにも関わらず、上記 2 つの問題が属するような、一般化された制約付きのマッチング問題においては、大きなサイズを達成するようなメカニズムは文献ではまったく提案されてきませんでした。

本論文では、とても一般的な上限制約のついたマッチングの問題で、必ず大きなサイズを達成するメカニズムを構成しました。制約なしの問題で達成できる上限である、最大マッチングに対して $1-1/e \approx 63.2\%$ のサイズのマッチングを達成できることを示しています。

3. 富山国際大学シンポジウム「イノベーションのゆくえ」

財団にも広報にご協力いただいたので、ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、2018 年の 8 月 8 日 (水) に、富山国際大学主催の「イノベーションのゆくえ ～マネジメント、経済、デザインの世界的潮流～」に講演者の 1 人とし

で登壇いたしました。現在、富山国際大学の現代社会科学部で講師を務めている、元 FOS 奨学生の重本祐樹さんの企画で、同じく奨学生のハーバード大学の武田悠作さん、ジョージア工科大学の岡本一秀君との登壇でした。

私の論題は、「技術革新が生み出す新しいマーケットと市場設計問題」としまして、技術革新が生み出した新しい市場の構造の話と、そこに導入されるべき望ましい規制および規制緩和（つまりマーケットデザイン）についてご説明しました。昨今では、技術革新によって、様々な新しい財の取引が行われ、財の取引スタイルも多様になっています。このため、旧来の「多数の売り手と、多数の買い手が市場に参加し、単一の価格で取引を行う」という市場以外の、様々な新しい特徴を持った市場が誕生しています。このような状況では、当然ながら、古典的なモデルを使った分析の当てはまりは必ずしもよくないため、分析する新しい市場に特化した、新しい分析を注意深くする必要があり、そのためにマーケットデザインの技術は有用だ、というのが、私の講演内容でした。

社会科学的な分析、および政策提言が、実社会で真にその価値を発揮していくためには、専門家以外の方々にも、我々の研究がもたらす洞察が有用であることを認識していただく必要があります。これを達成するために、今後もアウトリーチ活動にもしっかりと貢献していきたいと思っています。

富山国際大学の広報ページ：<https://www.tuins.ac.jp/news/index.php?ID=2125>

4. 経済セミナー 2018年10・11月号 海外論文 SURVEY

本日発売の経済セミナー2018年10・11月号の海外論文 SURVEY コーナーに、私が書いた記事の「資源の利用免許の新しい形：自己査定型の資産税と、投資と配分の効率性」が掲載されています。Weyl and Zhang (2018): "Depreciating Licenses" の3ページの解説記事です。草稿を読んでコメントをくださった、奥村恭平君、黒岡映美さんにお礼申し上げます。

固定資産税をはじめとする、種々の資産税や電波を含む資源免許の費用は、実は市場価値に基づいて計算するのではなく、利用者の私的価値に基づいて計算

するほうが配分の効率性において望ましいという構造が面白いと思い、解説の対象として選びました。ご興味がおありの方は、ぜひお近くの書店・図書館でお探してください。

2016年春より、計6回に渡り、原稿のご依頼をいただいていた、海外論文SURVEYコーナーですが、私は今年、ジョブマーケットに出ますので、このコーナーは今回の記事が最後になるかと思えます。貴重な勉強の機会を与えてくださった日本評論社の皆様に厚くお礼申し上げます。

5. 終わりに

あらためて私の留学生活をご支援くださっている、船井情報科学振興財団の皆様にご礼を申し上げます。今回は就職活動でいつもにもまして時間がなく、簡単な報告書となってしまう、恐縮ですが、一段落してからまとめてご報告するというご容赦ください。いただいたご支援に見合う結果が出せるよう、引き続き全力を尽くします。



夏の一時帰国からスタンフォードに戻る際に、ロサンゼルスで長めのトランジットがあったので、現地で友達と会い、科学館でスペースシャトルを見たり、天文台に上がったりして

きました（写真右の2人は、元 FOS 奨学生の南出将志君、FOS 奨学生の塚本紘康君）。急なお願いだったのにも関わらず、色々と案内してくれて本当にありがたかったのですが、あまりにも時差ボケが酷くてまったく頭が回っておらず、彼らにはちょっと申し訳なかったです。トランジットで寄り道をするなら、アメリカ → 日本の移動のタイミングで行ったほうがよさそうです。



最近、就職活動で忙しく、なかなか部屋の片づけや料理に時間が割けないので、やや低頻度になっていますが、それでも時々、我が家に人を招いて飲み会をしています（右2人は、FOS 奨学生の谷川洋介君、胡緯華君）。直近で凝って取り組んでいるのは、Stanford shopping center の中にある肉屋で販売されている、Fred's Marinated Meat（通称 黒肉）という、スタンフォード界隈の日本人から圧倒的な人気を誇る漬けこみ肉の再現レシピの作成です。